

調査と研究②

東松浦半島・唐津・多久の 将来イメージ

Regional Planning for Higasimatsuura –
peninsula,Kratsu and Taku City

東京第一部会
猪狩 達夫（環境プランナー）*

②

はじめに

昨年度「いき。つしまニューアイランドづくり」というタイトルで、ユーラシア大陸に最も近い日本の2つの島、壱岐・対馬を対象にその将来構想について調査研究し論述した。そこで今回は、日韓トンネルと九州本土との最初の接点となる東松浦半島・唐津及び多久地域に焦点を合わせて調査、構想計画を試みた。調査は第1部会副部会長・清水馨八郎氏に筆者が同行し、2度に分け行われ、第1回は昨年（平成元年）9月下旬に佐賀県庁、東松浦・唐津・多久を中心に廻り、第2回は本年4月上旬、長崎県へのヒアリング、国際ハイウェイ建設事業団所有のセスナ機により、調査地域を航空視察した。以下は、これら調査資料をもとに当該地域のまちづくり構想につき、清水氏との論議を中心にまとめたものである。

1. 日韓トンネルと日本列島の接点・ベーススクエア

まず、日韓トンネルの路線とその受け皿（トンネルベース）となるのが九州北部の東松浦半島、唐津、多久及び州都福岡市、そして福岡と多久を

直角で結ぶ鳥栖市、この4都市地域である。即ち、日韓トンネルの日本側の入口を4点支持しようというものである。これら物理的なつながりを見ながら、夫々の歴史、地勢、文化、産業等を概観する。なお、4都市地域のうち、トンネルに直接的影響をうけず、また、大型都市として成長している福岡市は解明を除外するものとし、他3地域の母都市としての位置づけに留めるものとする。ここで、4都市地域、即ち、唐津・東松浦半島地域、多久地域、鳥栖地域、そして福岡市がほ

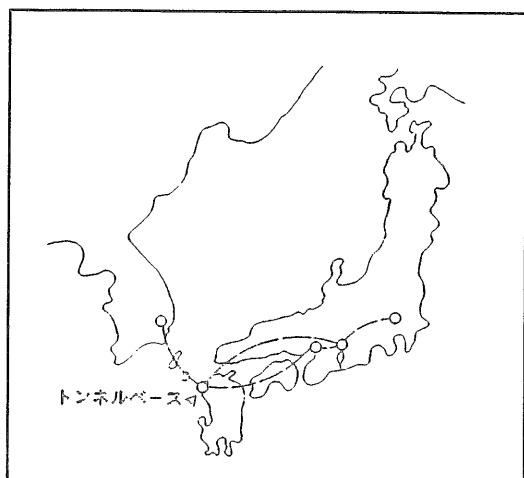
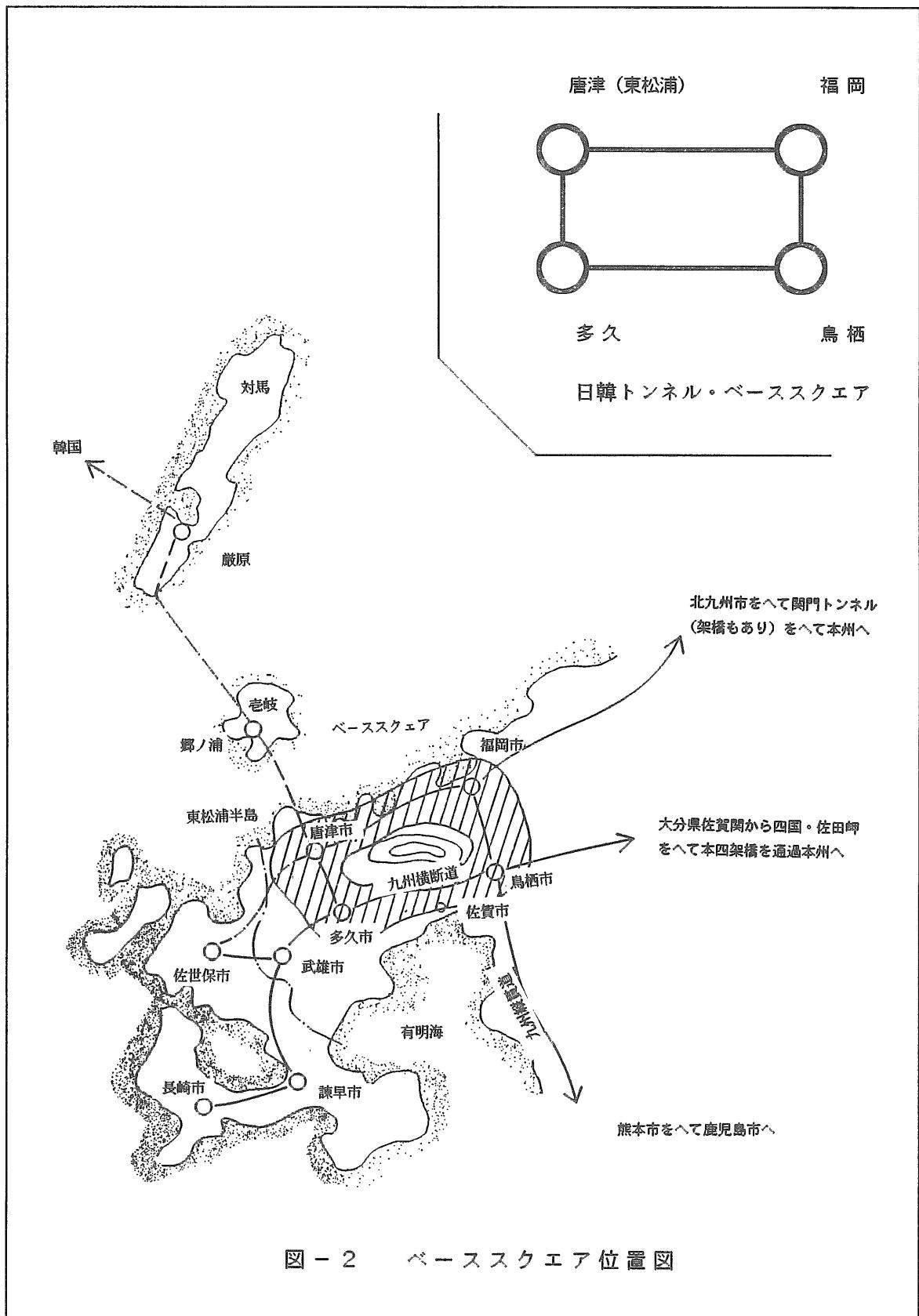


図-1 日本列島とトンネルベース

*株式会社イカリ設計 代表



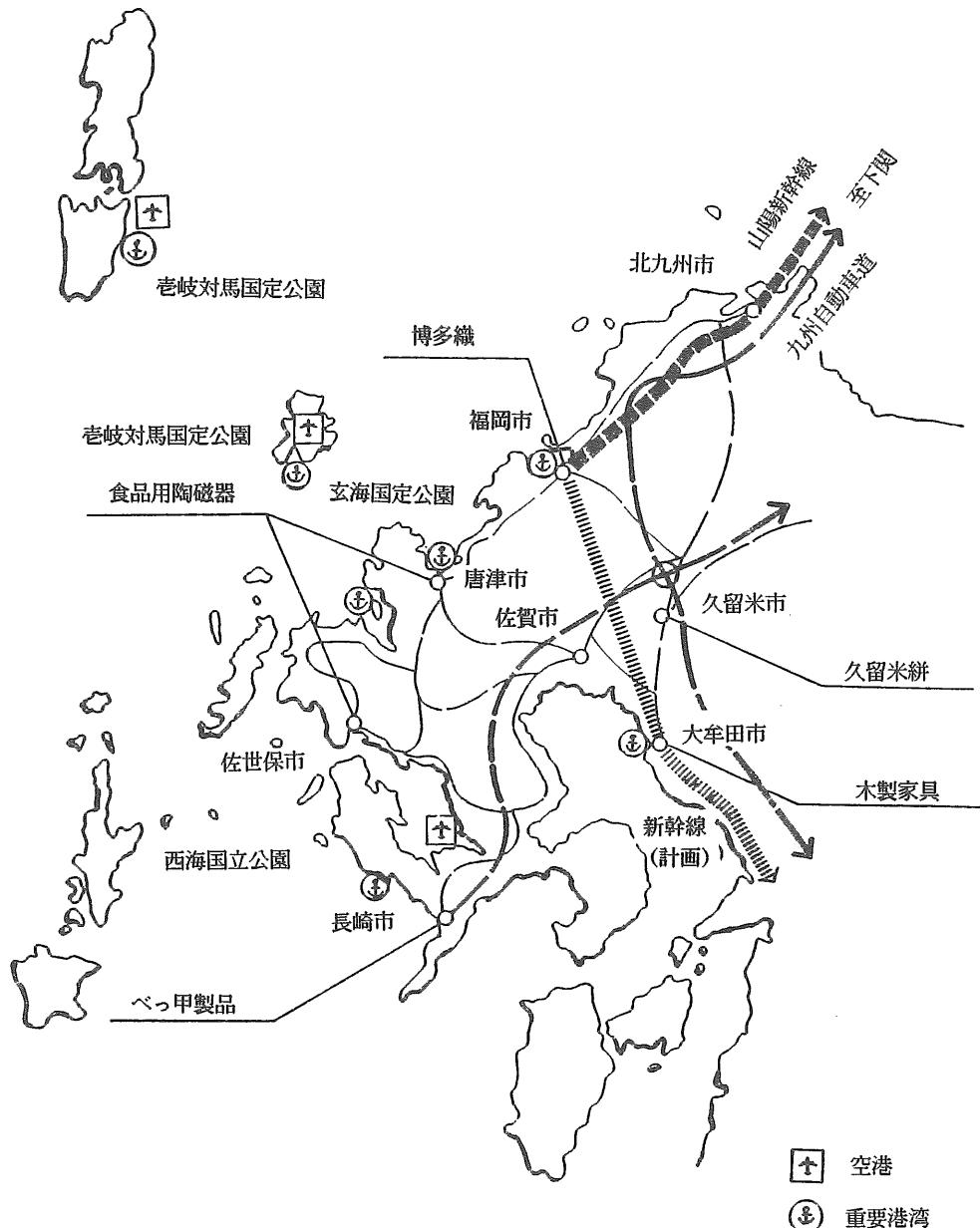


図-3 広域レベルの既存ストック

ば四角形スクエア（やや矩形に近いが）を描くのに着目する。そして、福岡市以外の3都市地域について次に踏査概観し、将来イメージ構想もうちたてるものとする。

まず、福岡市以外の3地域の成り立ち、特性、そして現況をさぐり、見極め、次に各地域が日韓トンネルが敷設されることにより、如何なる変貌をとげるか。どのような開発がなされるべきかを、「ベーススクエア構想」というテーマのもと紐解くこととする。

2. 唐津・東松浦地域の概況とその将来イメージ

2.1 唐津・東松浦地域の歴史性と風土

まず、日韓トンネルの本土の最初の玄関口となる唐津・東松浦地域からスタートする。唐津市及び、東松浦半島一帯は、古くから大陸との交流があり、大陸文化との接觸地点になっていた。これは、対馬や壱岐と同様に、刀伊、元など外敵の襲来の危険にさらされたのである。しかし、一方で朝鮮出兵の折には、その根拠地となったこともあります。当地域の人々の目は、常に海の彼方、即ち、大陸へとそがれていた。中世には松浦党が勢力を占め、徳川幕府が政権を確立してからは、県内の大部分が外様である鍋島藩の所領として明治を

迎えたのに対し、唐津藩は小藩でありながら、大名の交替が頻繁で、有明海側とは違った気風を持ち、それが今日の氣骨ある唐津人気質を育てたといえる。

現在、この沿岸一帯は出入の多いリアス式海岸で風光に恵まれ玄海国定公園に含まれ、西海国定公園や雲仙から佐世保を通じて唐津から福岡を結ぶコースが国際観光ルートとなっている。

2.2 東松浦半島の特性

北・西は屈曲に富むリアス式海岸線に囲まれ、半島内陸は「上場台地」と呼ばれる波状型テーブル台地となっている。気候は温暖で、雨量は少なく、又河川も少ない。産業は畑作農業が主で、特に肥前、玄海、鎮西町においてその依存度が高い。小規模農家が多く、土地生産性は低い。工業は食品工業、一般材器製造、木製品等である。唐津市が地域工業の主体を占めている。水産業は漁港をもつ呼子町が最も盛んで、まき網、あぐり網、小型底びき網、敷き網、いわし漁など沿岸依存型である。近年、真珠、ハマチ、鰯、アワビ、ウニの養殖などが盛んになって来ている。

就業率は3町いづれも45~48%となっており、極めて低い。東松浦半島は石器、土器、古壺などの遺跡が多く、古く縄文時代から先人の跡がうかがわれるとともに、多くの伝説とロマンが伝



写真-1 南吹風のマリンリゾートがイメージされる
呼子より加部島、馬渡島を望む

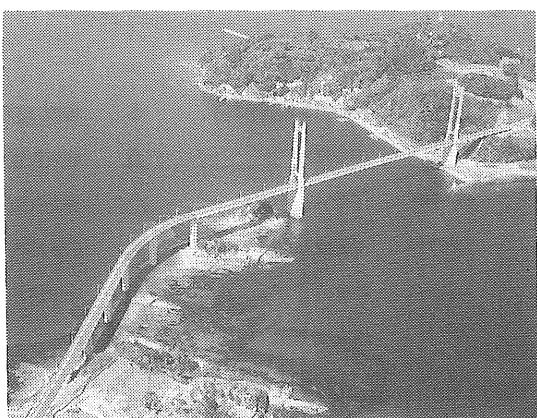
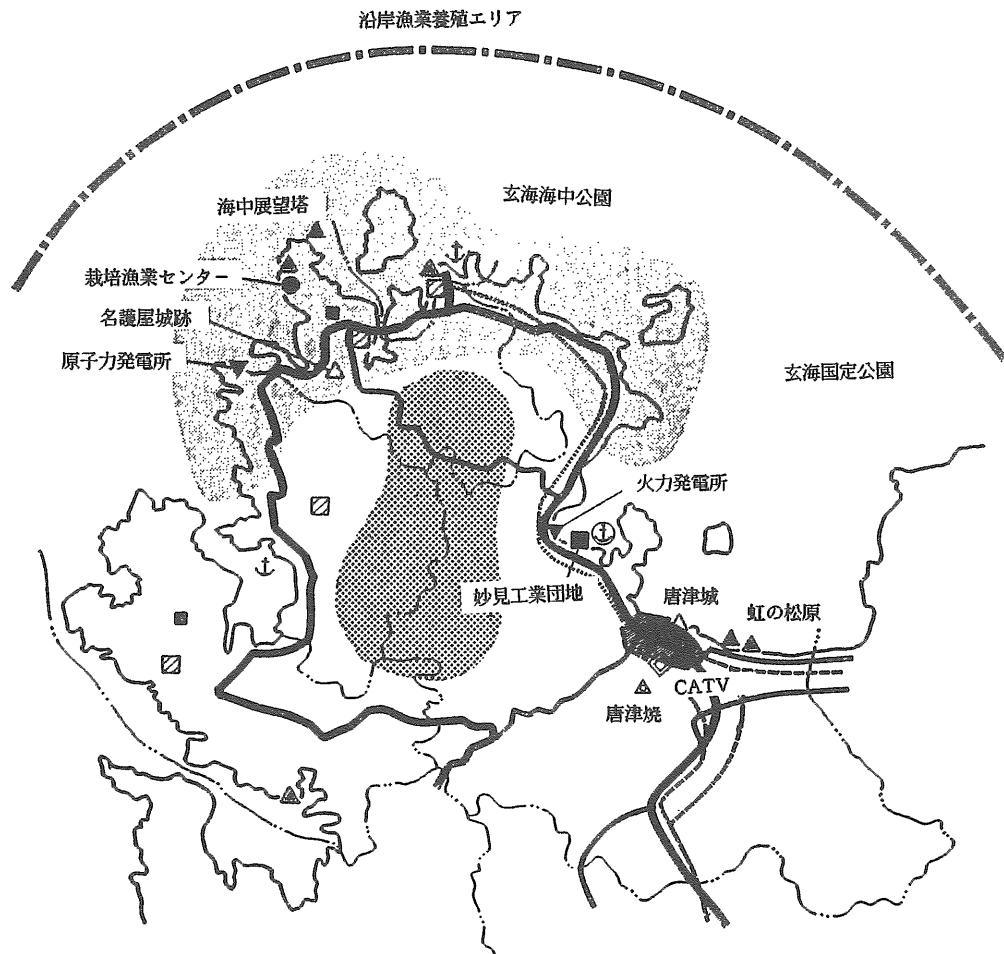


写真-2 デザインが素晴らしい呼子大橋は
観光資源となっている



凡 例

●	中心市街地	◆	港湾 (○は重要港湾)	●	栽培漁業センター
□	中心集落	▲	観光資源 (自然系)	■	工業団地
—	国道	△	観光資源 (歴史系)	■	工場団地
—	主要地方道	▲	国民宿舎	▼	火力発電所・原子力発電所
---	鉄道	▲	唐津焼	▨	高原台地内陸型リゾートゾーン
-----	鉄道 (計画)	◇	CATV	●	海岸べりマリーンリゾートゾーン

図-4 地域の既存ストックと可能性 (東松浦)

承されて來た。前述の如く、古くから古代日本、朝鮮、中国との交流拠点となっていた。16世紀の文録、慶長の役では秀吉出陣の基地となつた。また魏志倭人伝によれば、3世紀時代に現在の松浦地方に「未盧国」を形成していたといわれる。このような大陸に近いという歴史性はあっても、園域の拡大が海により遮ぎられると共に、交通の行き止まり地点であり、大都市からの開発波及が遅れるなど「半島」の特性に起因する経済、社会的条件の制約から、或る種の「取り残された」地域イメージはまぬがれない。

しかし、反面この半島性が幸いして開発の波にもまれず、美しい海岸線や未開の島々が呼子沖に存在している。さて、このような状況下の東松浦半島であるが、日韓トンネル開通後は完全にその制約条件が逆転する。即ち、そのリゾート性を生かして、大陸への出入口となることから、国際的保養ゾーンとして開発整備することが十分考慮される。

2.3 唐津・東松浦地域の可能性と将来イメージ

唐津市は、唐津焼という古くからの焼物の伝統



写真-5 呼子の2大祭り。(左:呼子大綱引 右:小友祇園祭)

呼子大綱引は400年前の豊臣秀吉が名護屋城に陣をかまえた頃から続いているという町最大の年中行事。小友祇園祭は海をわたる山笠として全国的に有名。このような祭りがリゾート地呼子に色を添える。

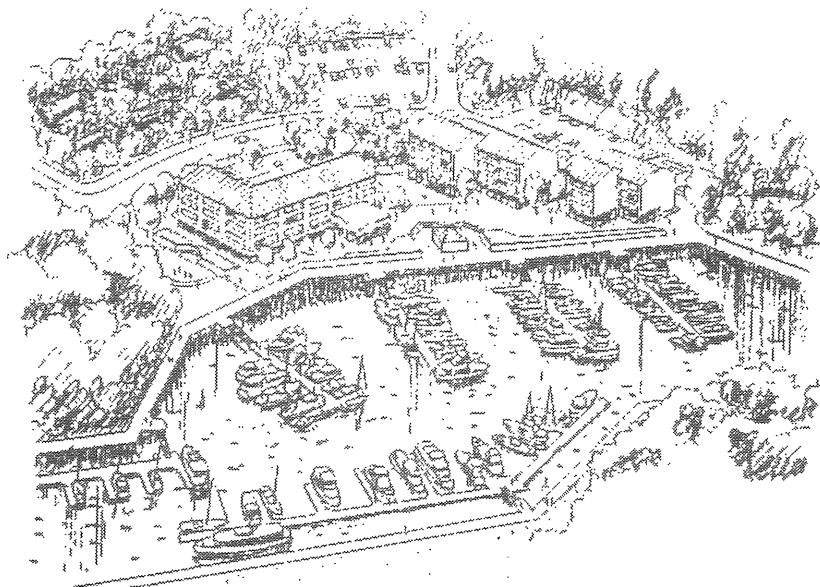


写真-6 東松浦国際コースタルリゾートのイメージ（マリーナ部分）

を生かし、又、工業都市としても妙見工業団地の充実と共に伸長するきざしをみせている。そこで、やきもの産業を更に伸ばす意味でニューセラミックス産業を新しい工業として確立する。リゾート都市としては、松浦川河口脇には名城唐津城があり、虹の松原があり、市の東部には、神功皇后伝説のある鏡山がある。焼物の里も含めて、観光都市としても磨きをかけ、東松浦地域と共に「玄海コースタルリゾート」として再生、位置づけられよう。

さて、東松浦半島の現況は、特に呼子、鎮西、玄海町等はリアス式の美しい海岸線をもち、呼子町には海上に加部島、馬渡島、加唐島などがあり、すでに町では「呼子コースタルリゾート構想」を練り始めている。鎮西町には、太閤ゆかりの名護屋城の趾跡や、祭りに400年の伝統をもつ大綱引きや、全国的に有名な海の祭り「小友祇園祭」があり、東松浦のリゾート色を倍加させる。又東端には海中展望台があり、西側に栽培漁業センターがある。肥前町には、天然記念物“あこう”（熱帯植物）自生地、海釣適地も多い。

さて、以上のような状況下で、将来構想をうちたてるとするなら、上記4地区を、呼子・鎮西ゾーンと、玄海・肥前ゾーンの2ゾーンに大きく分け考えるものとする。まず、呼子・鎮西ゾーンは、日韓トンネルの入口直下でもあり、超高級マリーナをもつ、世界一流のリゾート基地として育て上げる。大型クルーザー、ヨット、モーターボートの係留可能港を設ける。そして、加部島、馬渡島にはヨーロッパの地中海、エーゲ海の沿岸や島々にあるような白亜の建物群による別荘地を形成、これら高級別荘地には、日本人のみならず、東南アジアの人々、欧米人にも適応できるリゾートを形成する。マリーナの周囲には3～4層のコンドミニアムを建て、マリーンショッピングゾーンを形成する。そして、沿岸、内陸の風光明媚なエリアに一戸建て別荘地を面的につくる。東松浦半島は波状型テーブル台地でそのゆるい起伏はゴルフ場に向いている。山林と一部農地を転用し、数カ所のゴルフ場を建設する。又、隣接してテニスコート村・プール・ゴルフスクール・エアロビクスセンター等も設置する。

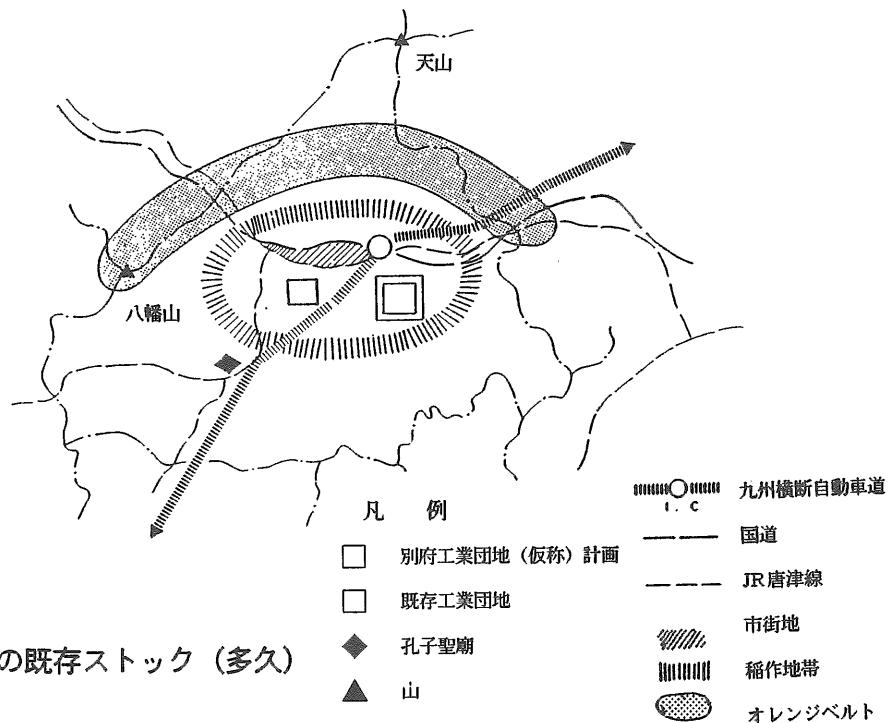


図-5 地域の既存ストック（多久）

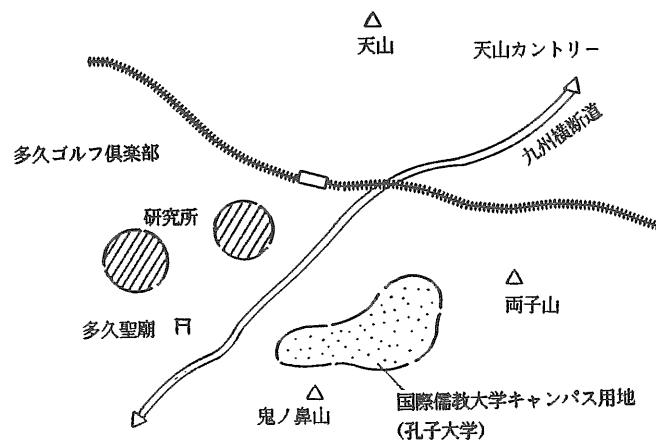


図-6 多久研究学園都市のイメージ

3. 多久・鳥栖地域

3.1 多久市の概況と特性

多久市は、佐賀県県央の位置にあり、北の背振山系、北東にそびえる筑紫山脈の主峰天山（1,100 m）、西の八幡岳をはじめ、船山、鬼の鼻山など300～1,000m程の山々に囲まれた盆地である。これら周囲の山々から発する河川が、市の中央を貫流する多久川に注ぐ。山麓にはみかんを中心とする山麓産業が盛んである。多久の歴史は、維新前から炭鉱の採掘、唐津線が開通し、明治、大正、昭和と飛躍的発展をみせ、昭和29年炭都形成を目指して多久市が誕生した。しかし、エネルギー革命により炭鉱は閉山し、人口は激減したが、みかんなど甘きつを主とする山麓農業や、炭鉱の跡地の有効利用した田園工業都市への脱皮が目論まれている。人口は昭和55年26,100人、昭和59年に25,600人と横ばい、もしくは減少気味である。

多久市はもともと多久、東多久、西多久、南多久、北多久の5町村が合体して出来た行政体だが、商業核が東多久、西多久に寄り、行政核は中多久といわば芯のない市となっている。しかし、昭和62年に多久市を横断する形で九州横断自動車道ができ、多久インターにより市と結接した

が、これが九州縦貫道とつながり本州とも結ぶ県央の玄関となった。この存在は21世紀への市の発展のカギを握るものである。

歴史的な建造物では多久市の南東に孔子廟がある。これは元禄12年（1699年）から20年の歳月をかけ、宝永5年、聖廟を創建、これは現存する世界最古の孔子廟で、国の重要文化財に指定されている。この聖廟は、儒学を重んじた多久邑主の多久茂文が建てたものである。多久のシンボルでもある。聖廟は日本には3カ所しかなく、この多久が最も古い。現在でも、年2回、孔子を祀る典礼の「釀菜」の儀が行われている。

隣接地にあった東原庠舎（藩校）という学校は士農工商の身分を問わず、誰でも入校できたオープンな学校であり、飯盛挺蔵、志田林三郎ら数多くの学者を生み、古来より「文教の地」と称された。ここに於いて、多久は「研究学園」として素地は十分にあるということが分かる。

3.2 鳥栖市の概況と特性

鳥栖市は佐賀県の東の玄関口に当たり、福岡県に突き出た形で接しており、長崎本線と鹿児島本線の分岐点で、律令時代の昔から文通の要地であった。近年は、九州自動車道と九州横断鉄道の交差地で日本有数のインターチェンジがあり、国道3号線と34号線もここで分岐し、九州における

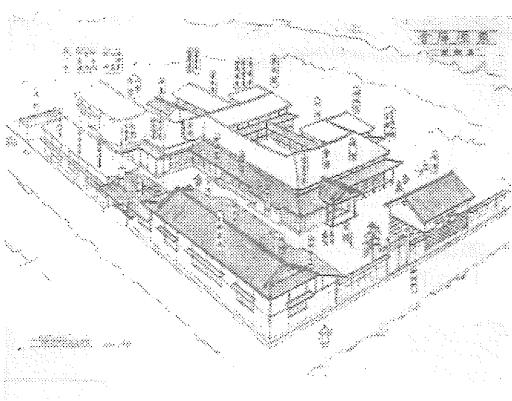


写真-6 東原庠舎復元予想図

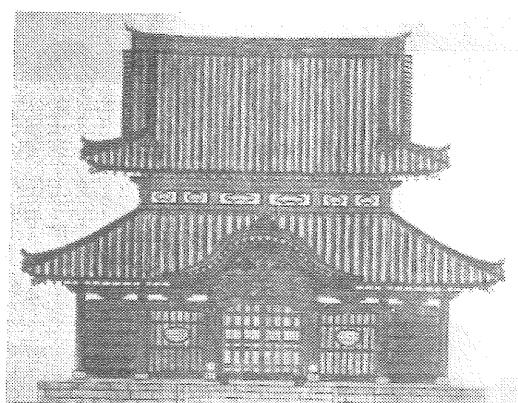


写真-7 多久聖廟復元予想図



写真-7 東洋一のインターチェンジを誇る鳥栖インター



写真-8 近代化が着々と進む鳥栖市の工業
JR操車場跡地を総合的開発が目論まれている

表-1 佐賀県工業の概要（昭和57年）

	工場数	従業者数人	1工場当たり 従業者数人	製造品出荷額 百万円	従業者1人当たり 製造出荷額 万円
多久市	69	2,216	32	25,742	1,162
佐賀市	359	9,120	25	105,664	1,159
唐津市	162	4,992	31	61,049	1,223
鳥栖市	120	6,310	53	166,491	2,639
伊万里市	182	6,152	34	79,808	1,297
武雄市	91	1,910	21	14,720	771
鹿島市	92	2,559	28	28,023	1,095
圏内市計	1,075	33,251	31	481,497	1,448
佐賀県	2,228	64,842	29	918,313	1,416
多久市の対県 シェア	3.1 %	3.4 %		2.8 %	

工業統計

表-2 佐賀県工業の概要（昭和62年）

	工場数	従業者数人	1工場当たり 従業者数人	製造品出荷額 百万円	従業者1人当たり 製造出荷額 万円
多久市	73	2,416	33	24,873	1,030
佐賀市	370	8,546	23	119,969	1,404
唐津市	173	4,937	29	69,829	1,414
鳥栖市	125	6,862	55	227,746	3,319
伊万里市	190	6,185	33	85,993	1,390
武雄市	84	2,150	26	19,526	908
鹿島市	95	2,469	26	28,109	1,138
圏内市計	1,110	33,565	30	576,045	1,716
佐賀県	2,293	66,151	29	1,099,055	1,661
多久市の対県 シェア	3.2 %	3.7 %		2.3 %	

工業統計

陸上交通最大の要衝となっている。このような立地の良好さもプラスして、鳥栖市は工業が盛んであり、県下では随一の出荷額（2270億）を誇り、佐賀市も引離す。工場数では125と県下4位だが、従業員が1工場当たり55人と多く、規模平均が大きく、産業の近代化が進んでいる。1人当たりの出荷額も332万円／人と佐賀市の140万円／人を大きく引き離している（昭和62年度）。また、鳥栖市では「北部丘陵新都市」を現在計画中である。同市は隣接する久留米市とともにテクノポリスとして指定され近い将来、九州有数のニューインダストリー地域として更に一大発展の兆しを見せている。

3.3 多久市の可能性と将来イメージ・多久コンフューシアンシティ計画

当地には儒学の祖、孔子を祀る多久聖廟がある。近年、日本では孔子ブームといわれるほど儒教が見直され始めている。これを機に当地の多久聖廟周辺の場所で天山を仰ぐ地に「国際儒教大学」もしくは「孔子大学」をつくり儒学の国際的

メッカとする。学部は4学部からなり、経営学部、政治学部、人間学部及び生産科学部である。そして、多久の立地を生かして産業と合致させた産学協同の町づくりを行う。

又、国際的にひろく学生を募り、特に中国、東南アジア、欧米等から儒学を志向する学徒を住ませ、学び町とする。そして、学業の町、「教育文化都市多久」の名を世界的なものにクローズアップさせる。多久地域に新しい先端産業を導入し、研究所群を建設し、儒教大学の生産科学部を連動し、産学協同の研究学園都市をつくる。

なお、そのキャンパスは、多久聖廟に程近い丘陵の谷間と丘に、タワーを中心に構成され、あたかもヨーロッパの中世都市のように建つ。すべての学生は、学内のドミトリーに生活する全寮制である。又、教職員や研究者には、中心市街寄りの地に街なみを配慮しゆったりとした家族向きの一戸建て集合住宅地を配置する。先端産業の研究所群もまとめた団地形式でハイテクパークを構成し、後述TAKTOS SILICON VALLEYと連繋させる。

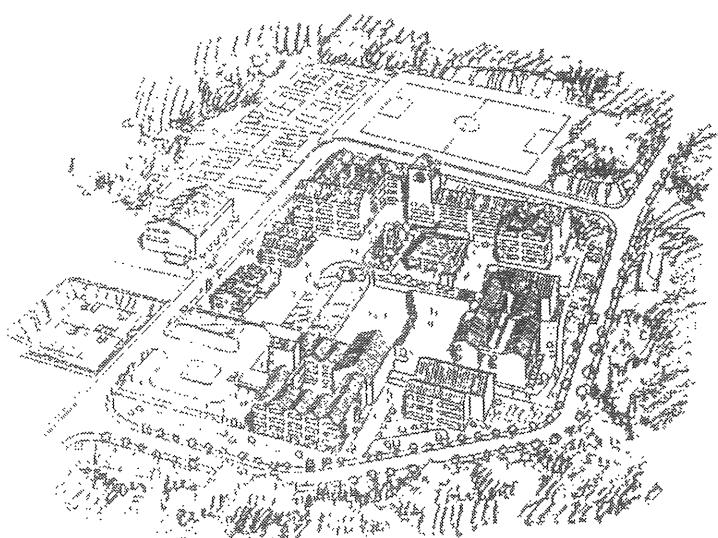


写真-9 国際儒教大学のキャンパスイメージ

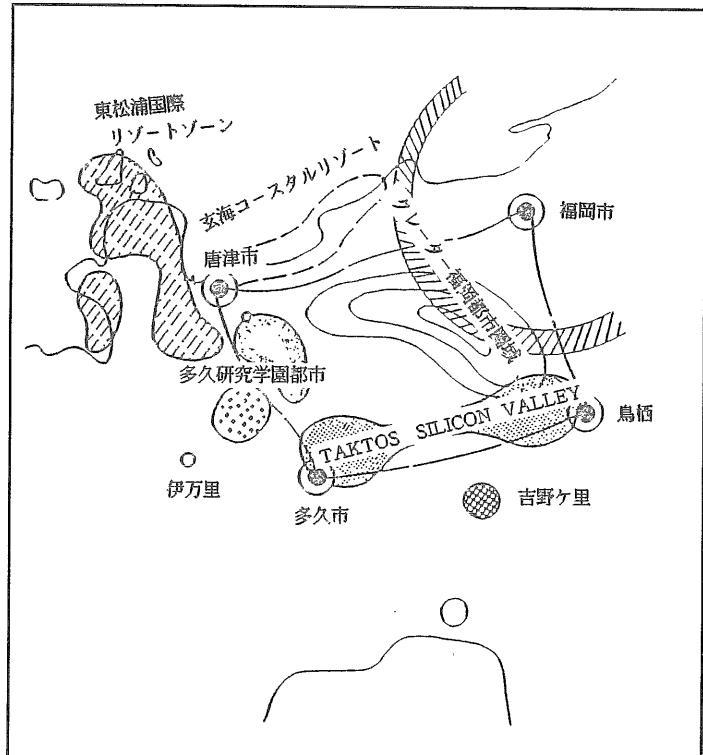


図-7 TAKTOS SILICON VALLEYとベーススクエア

3.4 TAKTOS SILICON VALLEY (多久鳥栖シリコンバレー計画)

鳥栖市は前述のように、今や新興工業都市として目覚ましい伸びを示している。そして、久留米市とともにテクノポリスとして佐賀県下きってのハイテクノロジーシティとなっている。ここで日韓トンネルが開通することにより、多久市が九州横断道路との結節点となる。幸いにして背振山系により、日本海からの冷たい空気は遮ぎられ、背振山の南麓は太古の昔から極めて温暖であり、近年発掘された佐賀県神崎町の吉野ヶ里遺跡は耶馬台国（定説はないが）の中心的都市があったという事実をみても、いかに気候条件がすぐれていたかを物語るものである。九州横断自動車道の北側で背振山系の南斜面の絶好の地に多久と鳥栖をつなぐ地帶に、一大先端産業の工場・研究所を誘致建設し、米国カリフォルニア州のシリコンバレーに勝るとも劣らぬTAKTOS SILICON VALLEYを形成する。そして、周辺地域には、産業関連住

宅、スポーツやリラックス施設を十分にとり入れたリゾート型住宅地を夫々職住近接ゾーンに配置する。

3.5 新しい吉野ヶ里古代文化ルートの開発

約2000年前の耶馬台国の古都といわれる吉野ヶ里遺跡の発見は、ひとり日本文化のルーツをたどるだけではなく、世界の歴史に大きなインパクトを与えており、これを観光としてだけではなく、日本の古代文化を紹介する「耶馬台国歴史博物館」の設置等を考える。

4. ベーススクエアと九州全域・国土計画

4.1 ベーススクエアと壱岐・対馬・東南アジア

日韓トンネルが壱岐・対馬・九州北部とつながることによるインパクト

とその効果は測りしれない。まず、地域に求められる性格は、（1）国際性、（2）基地性（ベース）、（3）拠点性（産業、文化の結節点）、韓国、東南アジア諸国の受け入れ地域としての対馬、壱岐、ベーススクエアゾーンはおしなべて上記3点を兼ね備えなければならない。このうち特に（1）の国際性は重要である。いわば、開通と同時に大量の自動車という大河の流れを一部でもせき止められるのがこれらの離島であり地域である。これらの地域はまさに大陸と日本本土の接点となるわけであり、これらの接点で開通後、何が起るかを今から予測しなければならない。

4.2 ベーススクエア = 4極構造の位置づけ

日韓トンネルの存在如何に拘らず、福岡市及び鳥栖市の両市は、伸長をつづけるであろうが、西側の唐津市+東松浦と多久市については、日韓トンネルの開通でその位置づけが激変することはすでに述べているが、ここでそれら4極の連携すべ

き役割につき以上をまとめてみる。

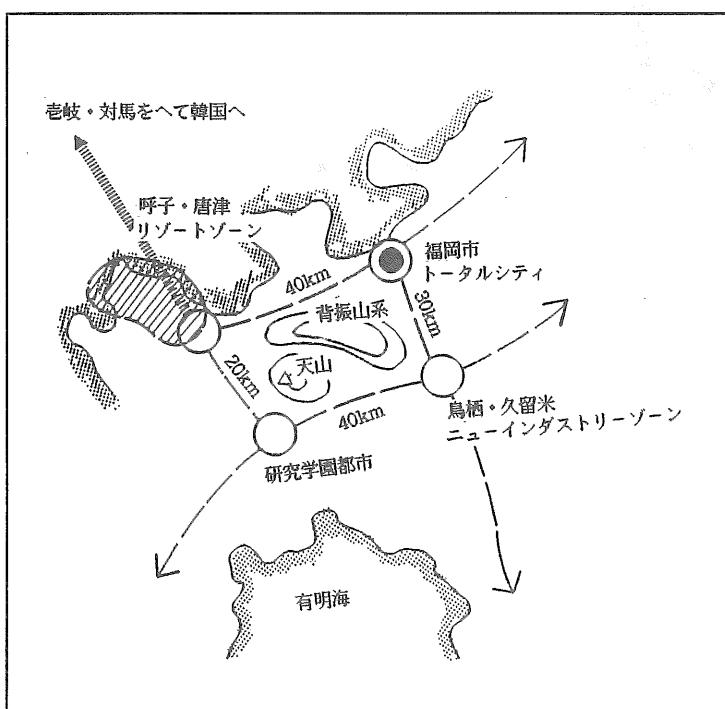
特に、経済的、文化的、商業的な母都市として、今後ともかなりの長期に亘って発展しつづけるであろう福岡市に他3極が大きく影響を受け、かつ追従することは止むを得ないが、夫々の個性をもち、役割分担することが肝要である。これらは県域という行政区界をかなり超越して考慮しなければならない。すると、唐津+東松浦地区はやはり位置、土地形状、人々の指向からみてリゾート地として立地する条件をもつ。即ち、生活の中で「遊」もしくは「悠」の部分である。来るべき高齢化社会にそなえての受け入れ施設等も必要である。

多久市は、従来の山麓産業に加えて、新しい先端的産業を育成しつつ、大学都市として成長する。即ち「学」であり、「研」が主体となり、周辺の山裾は、ゴルフ場などに格好な地形が多く、スポーツレクリエーションゾーンとして内陸型リゾートとしても適している。そして、多久インター付近には、工業基地としての流通センターがはりつく。さて、鳥栖市は、今まで久留米側に



写真一9 吉野ヶ里

向いているものを、今度は佐賀、多久側に向かせ、背振山系の南麓、九州横断自動車道の北側にTAKTOS SILICON VALLEYができ、九州で最大の先端産業の基地を形成し、いわば「生産の場」となる。それらの後背地に住宅がはりつく。以上のように、4地域が夫々別々に単独に開発、形成されていくものではなく、それらが幅広く塊状に連なり、それぞれ地域の特長を生かしたら、連鎖してベルト型の都市として町づくりが行われるのである。



図一8 ベーススクエア・四極構造

4.3 ベーススクエアと西佐賀と長崎エリア

伊万里や有田などの焼物の故郷につながり、湯の町武雄を経てハウステンボス、長崎オランダ村、そして異国情趣と数々の近代史蹟をもつ長崎市旧市街へのリゾート観光ルートが拓ける。なお、九州横断道路の開通により、福岡市中心部から新しい国際村のハウステンボスまでわずか1時間半の時間距離に短縮される。

4.4 ベーススクエアと熊本、鹿児島

鳥栖インターから九州の中央部熊本、南九州の宮崎、鹿児島への

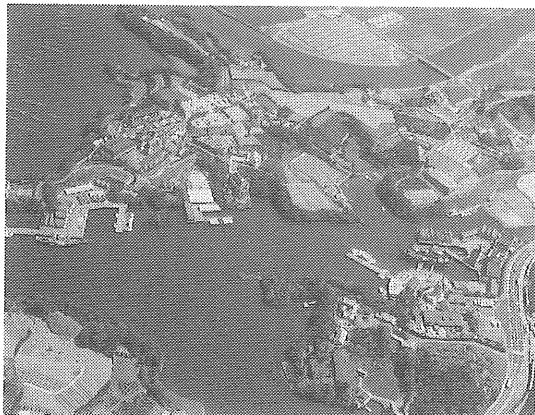


写真-10 長崎オランダ村の府観。新しい観光スポットはハウステンボスと共にベーススクエアとつながる

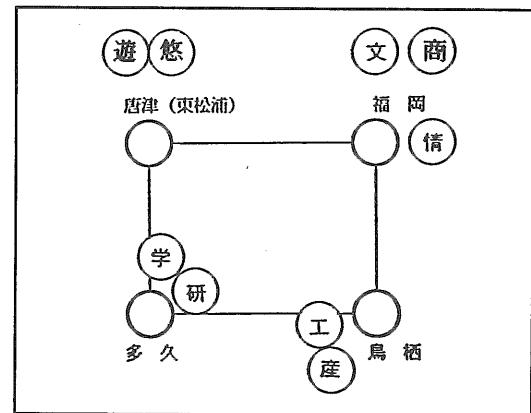


図-9 連垣都市ダイヤグラム

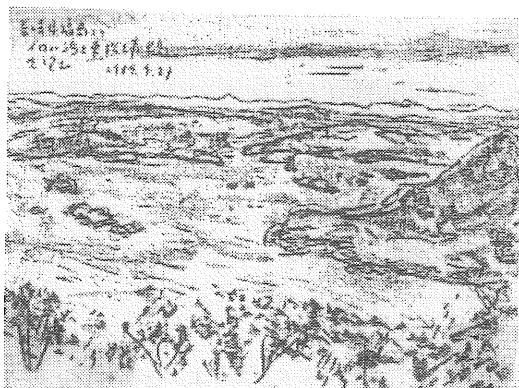


写真-11 長崎県福島よりイロハ湾と東松浦を望む
(スケッチ：猪狩 達夫)

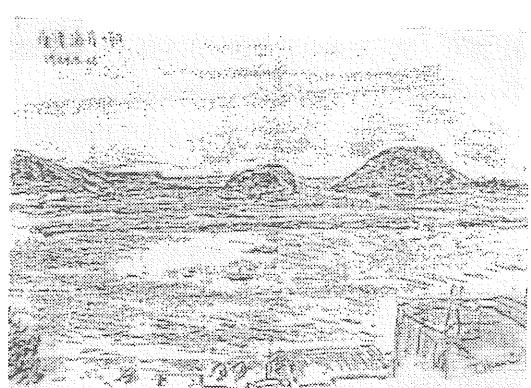


写真-12 唐津海岸の朝 (スケッチ)

ルートは、九州縦貫道の完成で切り拓かれる。これにより、日韓トンネルの開通は殆ど九州全土が1つの大陸との接点地域に含まれてしまうことになろう。

4.5 ベーススクエアと大分、四国、本州ルート

横断道路により、日田、久住、湯布院、別府、大分に至るルートはさらに、佐賀関半島から四国の佐田岬に至る海底トンネルで結ぶルートにより四国経由本州につながる新しいルートが切り拓かれる。

本州には、従来の関門トンネル、関門橋を通じて、新幹線を含む太い幹線があり、これに加えて、大分、四国回りの2本の幹線ルートにより、

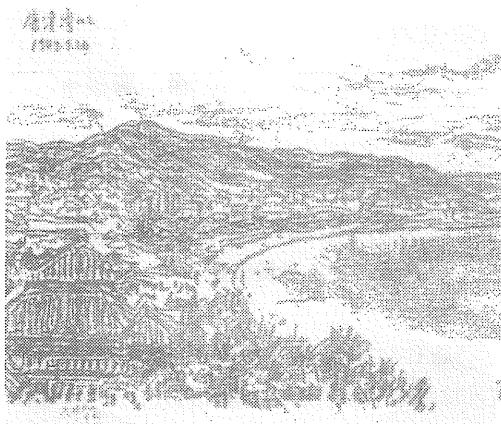
本州・九州・四国は完全に一体化される。

むすび

これまで、離島の壱岐、対馬そして九州本土の東松浦半島、唐津、多久地域をすでに確立した都市福岡市、鳥栖市をからませ論述してきた。地域開発の最重要なことは、前回にも強調したことがあるが、いかに地元に根ざす計画を行うかであり、どれだけ地域住民がメリットを受けるか、そしてひいては、日本国民全体にプラス要因となるかである。

日韓トンネル建設事業が、ゆめゆめ乱開発を誘

発してはならないし、心ない企業の土地買収の標的となつてはならない。そのためには早目、早目に、国、県、自治体等行政体制で将来を予測した計画をつくっておかなければならぬ。或は、地元住民側もしっかりととした将来イメージを持っておく必要がある。課題は常に1つ、「美しい自然をどうすれば保全しながら、国や民族を超えて快適で素晴らしい人間環境がつくれるか」である。



写真ー13 唐津湾にて（スケッチ）

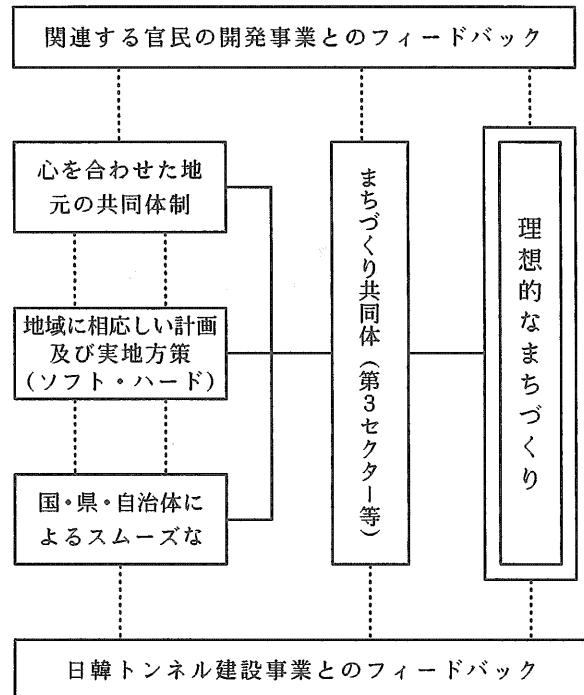


図-10 日韓トンネル・地域まちづくりの考え方